

A Week On The Concord And Merrimack Rivers

にみられる東洋思想について*

六 川 信**

Henry David Thoreau (1817-1862) の読書を分類すると、博物学のを別にすれば、エマソン、ギリシャ・ラテンの古典、東洋の聖典、イギリスの17世紀の詩人、アメリカの歴史、アメリカ・インディアン、旅行記に大別できるであろう⁽¹⁾。ソーロウがどの分野に最も関心をもっていたかを特定することは難しいが、古典に対する関心の深さと東洋の聖典への評価の高さは、ソーロウの読者の誰もが気付くことである。東洋の聖典はトランセンデンタリストにとっては必読の書でもあった。ソーロウに及ぼした東洋思想の研究は、今まで、多数の研究家によって試みられてきた⁽²⁾。ソーロウの東洋思想や東洋文学の研究(the Orientalism)は印度のヒンドゥー教の聖典と中国の儒教の経典が主であるから、ソーロウの場合、東洋思想というとき、印度思想と中国思想を指す、と言える。まず、ソーロウと東洋思想との関係について、著名な批評家の見解を検討しておくこととする。

William Ellery Channing や Henry S. Salt は、ソーロウがヒンドゥー教に関心をもっていたことに注目しているとはみられない。次に、Mark Van Doren は、ソーロウは三つの文学的源泉——東洋聖典、西洋古典、過去の英国の詩人たち——によって養われたと書き、「ソーロウは西洋的だ。…ソーロウに対する東洋哲学の影響は広くも深くもない。…かれは、東洋的態度の真の意味を理解しているとは言えない。…ソーロウは象徴や文章を東洋の書物から借用しているが、思想は借用していない。彼の心に残ったのはその文章であった。…ソーロウは東洋の精神よりギリシャ精神をうまく理解できた人であった」⁽³⁾と述べている。ドーレンの見解は、東洋聖典がソーロウに与えた影響を強調しすぎることなく、均衡がとれているように思われるが、ソーロウと東洋の書物との関係についての深い研究にうらづけられたものではない。

Arthur Christy は、ソーロウと東洋思想の関係を詳細にとり扱っており、この研究のバイオニア的役割をはたしている⁽⁴⁾。アーサー・クリスティはドーレンの考えを基本的には踏襲しているが、結論は非常に異なっている。その主旨を要約すれば、「ソーロウはヨーガ行者のように靈魂を鍛えるという目的で孤独と瞑想を求めたが、彼はリアリストであり自虐的な苦行には関心がもてなかった。そのため、ヨーガ行者のような訓練方法をとらなかった。要するに、ソーロウは自分の思想を広げるため印度思想を借用したが、ニュー・イングランドの宗教の遺産をうけついでおり、ニュー・イングランドのヨーガ行者であるにすぎない」ということになる。クリスティは印度哲学のソーロウの受容という視点に立ってはいるが、ヒンドゥー教とヨーガの一般論に終っている感がある。

* 昭和54年10月 日本英文学会中部支部大会において発表

** 一般科 英語 助教授

原稿受付 昭和56年9月24日

Henry Seidel Canby は、Ralph Waldo Emerson の *Nature* とヒンドゥー教の聖典がソーロウの思想の形成の上で重要である、と述べる。彼は、印度思想がソーロウの意識に深く分け入っていること、特に *The Bhagavad-Gita*⁽⁶⁾ がソーロウに重要な影響を与えていることに注目している。だが、キャンビーは「ヤンキーは東洋人にはならなかった。ソーローは必要とする思想を借用し二度新生したヤンキーとなったが、以然として変わらぬヤンキーであった」⁽⁶⁾ と述べている。

以上の意見に対して、Sherman Paul は、『マヌ法典』(*The Laws of Menu*) がソーロウの霊的生活への案内書となり、ブラフマン (Brahman) がソーロウの探求する霊的主人公となったと論じ、興味ある論評を展開している⁽⁷⁾。Walter Harding も、ソーロウは孤独と瞑想の必要性の根拠を東洋文学の中に発見し、東洋文学の中にすっぽりとひたっていることは明らかである、と述べている⁽⁸⁾。Miriam Alice Jeswine は、学位論文において、ソーロウに及ぼした東洋思想 (ヒンドゥー教思想) の影響がいかにも多大であったかを論述している。ジェスワインは、チャニング、ソールト、クリスティ、キャンビー、シャーマン・ポール等のソーロウ研究家は皆ことごとく、ソーロウがヒンドゥー教の聖典をどれ程深く研究していたかに注目していない、と批判する。ジェスワインは、ソーロウが読んだヒンドゥー教関係の書物をすべて読破した後、ソーロウの作品に見られるヒンドゥー教の影響を検討している⁽⁹⁾。

本稿では、ソーロウの処女作 *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (以下 *A Week* と省略) (1849) にみられる東洋思想の検討を試みたい。*A Week* はソーロウの傑作 *Walden* の初版本であり、序章「コンコード川」と土曜日から金曜日までの各章との8章で構成されている420ページの旅行記である。1839年の夏、ソーロウが兄 John と共に、ボートでコンコード川を下りメリマック川を上流へ進み White Mountains へ登り、二週間後にコンコードに帰来した舟旅がもとになっている。紀行文の体裁をとっているこの作品の実際の旅行記は131ページを占めるにすぎない⁽¹⁰⁾。他は、川旅の途上でのその土地の歴史、文学論、宗教論等でうまっている。「水曜日」の章の3分の2が友情論であることは、この作品の特質を如実に物語っている。

1

ソーロウが東洋思想に関心をもち始めたのがいつであるかは不明だが、Henry S. Salt, F. B. Sanborn, Arthur Christy 等の著名な研究家に従うなら⁽¹¹⁾、ソーロウとエマソンの交友は1837年ソーロウのハーバード大学卒業以後に始まり、ソーロウの東洋思想への関心を初めて喚起したのは彼の師友エマソンであった。ソーロウはハーバード在学中は東洋の書物を読んだことはなかったから⁽¹²⁾、ソーロウが東洋思想に関心を抱くようになったのは1837年以降であることは確かである。ソーロウの1838年8月22日の日誌には、“How thrilling a noble sentiment in the oldest books, — in Homer, the Zendavesta, or Confucius!”⁽¹³⁾ とあり、ホーマー、「ゼンド=アベスタ」、孔子を感銘をもって読んだことが述べられており、研究家の裏づけを提供している。ソーロウは自己と社会との関係について中国思想から学ぶところが多く、社会批評がその一部をなす *Walden* では中国思想への言及が多くみられる⁽¹⁴⁾。それに反して、自己修養では印度思想に多くを学び、自己の向上をテーマとした *A Week*

では、孔子のことばの引用が二か所、孟子からのが一か所あるにすぎない。

Confucius said. "Never contract Friendship with a man who is not better than thyself." (*A Week*, 288)

〈子曰、無友不如己者〉(『論語』一学而第一)

Confucius said: "To contract ties of Friendship with any one is to contract Friendship with his virtue. There ought not to be any other motive in Friendship." (*A Week*, 299)

〈子曰、友也者友其徳也。不可以有挟也〉(『孟子』一萬章下一)

Mencius says: "If one loses a fowl or a dog, he knows well how to seek them again; if one loses the sentiments of his heart, he does not know how to seek them again... The duties of practical philosophy consist only in seeking after those sentiments of the heart which we have lost; that is all." (*A Week*, 280)

〈孟子曰、仁人心也、義人路也。舎其路而弗由。放其心而不知求。哀哉。人有雞犬放、則知求之、有放心而不知求。學問之道無他、求其放心而已矣。〉(『孟子』一告子章句上)

以上の引用は「水曜日」の章の友情論の中にある。友情論が *A Week* に入れられたのは、Linck C. Johnson によれば、1848年であり、ソーロウがウォルデン湖を去ってからである⁴⁾。1845年には *A Week* の初稿は完成していたので、以上の引用はソーロウの最初の構想にはなかったということになる。*A Week* では、「月曜日」と「日曜日」の章を中心に、ヒンドゥー教の影響が濃厚である。従って、*A Week* における東洋思想は印度思想が中心だ、と言ってよいであろう。

2

ヒンドゥー教関係で、ソーロウがエマソンのすすめにより最初に読んだのは、Sir William Jones (1746-1794) の訳になる *The Ordinances of Menu According to the Gloss of Culluca* (1799年版) であった。では、いつこの『マヌ法典』にふれたのだろうか。キャンビーは1841年と述べる⁵⁾、多くの研究者もその説をとっているようであるが、ジェスワインは1840年と主張している。その根拠は、ソーロウの1840年8月17日の日誌に、"This fair modern creation is only a reprint of the Laws of Menu with the Gloss of Culluca."⁶⁾ とあるからである。筆者は、1840年から41年にかけてソーロウが『マヌ法典』を耽読していったとするジェスワインの説をとりたい。1841年3月の日誌には、"Menu says that the 'supreme omnipresent intelligence' is 'a spirit which can only be conceived by a mind *slumbering*.' Wisdom and holiness always slumber; they are never active in the ways of the world." (W, VII. 229-230) とある。ソーロウは『マヌ法典』から、宇宙に遍在する最高の神を知るには、静寂と瞑想が必要であることを学んだ、といえる。

1841年4月26日、ソーロウはエマスン家に寄寓し、エマスン邸の内外の世話をすることになる。エマスンはソーロウに造園、大工仕事などの腕を期待し、ソーロウは読書と散策の時間と場所を与えられた。ソーロウは、1843年5月エマソンの兄の息子の家庭教師としてニューヨーク市へと発つまで、エマスン家に滞在することになる。この二年間、ソーロウは、エ

マスの蔵書から東洋の聖典と思想書を読破した。彼は東洋の書物を系統的に読み、その傾倒ぶりはエマソンを凌いだ。ソーロウはエマソンより多く、また完全にヒンドゥー教の聖典を読んだのである。

1841年9月2日の日誌に、“The sublime sentences of Menu carry us back to a time when purification and sacrifice and self-devotion had a place in the faith of men, …” (W, VII. 280) とあり、ソーロウは『マヌ法典』から purity の原理を学んだことが明らかである。この年の夏、『マヌ法典』を耽読したソーロウが到達した一つの結論がこの原理である。『マヌ法典』は興味の対象というよりもソーロウの内面に深くしみこんでいった、とみられる。同年8月6日と7日の日誌はソーロウが感動をもって『マヌ法典』を読んだことを物語っている。“I cannot read a sentence in the book of the Hindoos without being elevated as upon the table-land of the Ghauts. …The impression which those sublime sentences made on me last night has awakened me before any cock-crowing.” (W, VII. 266-267) この Elevation (上昇, 崇高) の感覚は、ソーロウがこの教典から得たものであり、狭い個人から大宇宙の精神へと高まる気持を示している。エマソンは、霊 (soul) と業 (karma) というヒンドゥー教の教義が自分の思想に適していることを発見したのにとどまったのに対して、ソーロウは、その教義の精神と生き方そのものを学びとったのである⁹⁴。特に、『マヌ法典』の第6章及び第12章の「輪廻」と「最高の福祉をもたらす行為」の節は、ソーロウの思想と行動に最大の影響を及ぼしている。

『マヌ法典』にみられるバラモンは、ソーロウの精神生活の崇拜すべき人物像であった。ニュー・イングランドの保守的支配階級はインドの立法者が軽蔑する商業階級の人々であったのに対し、バラモンは最高のカーストに属するだけでなく、精神の探求が最も重要な仕事とする人々であったからである⁹⁵。瞑想 (meditation) と禁欲生活 (ascetic life) と孤独 (solitude) を求めてウォルデン湖に隠棲し自己の精神を純化しようとしたソーロウのモチベーションは、すでにシャーマン・ポールの意見を掲げたように、この『マヌ法典』によるものなのである。超絶主義者の間では、当時、森の小舎にこもって瞑想生活をするということが比較的一般に行われ、隠棲的生活は一つの流行となっていた。ソーロウの場合は、こうした流行に流されたものではなく、東洋の聖典の導きによったことは注目されていい。

“One of the most attractive of those ancient books that I have met with is the Laws of Menu. … I know of no book which has come down to us with grander pretensions than this.” (A Week, 154-155) このことばはソーロウが1844年に書いたものであることを考えるとき、ソーロウは『マヌ法典』の教義に導かれてウォルデン湖畔での孤独と瞑想の独居生活に赴いた、といえる。独居生活に入って1か月余たった8月15日の日誌に、“What if we were to obey these fine dictates, these divine suggestions, which are addressed to the mind and not to the body, which are certainly true,—not to eat meat, not to buy, or sell, or barter, etc., etc., etc.?” (W, VII. 382) とあり、『マヌ法典』に従おうとするソーロウの態度が表われている。ソーロウがウォルデン湖畔に赴いたのは、彼が“My purpose in going to Walden Pond was not to live cheaply nor to live dearly there, but to transact some private business with the fewest obstacles;…”⁹⁶ と述べているように、A Week の執筆が一つの目的であったこと

は確かである。だが、彼が “I went to the woods because I wished to live deliberately, to front only the essential facts of life, … I wanted to live deep and suck out all the marrow of life, … to drive life into a corner.”⁴⁴ と述べるとき、彼は『マヌ法典』の教義を脳裡においていたのである。ソーロウは、“The wisest conservatism is that of the Hindoos. ‘Immemorial custom is transcendent law.’ says Menu. That is, it was the custom of the gods before men used it. The fault of our New England custom is that it is memorial.” (*A Week*, 140) と述べるように、太古の時代の原始性と神聖にひかれていたようである。彼の東洋聖典への関心と原始主義とは通じているらしいのだ。

3

『マヌ法典』と並んで、ソーロウの思想形成に大きな影響を及ぼし彼をして新しき人間へと生まれ変わらせたのは、*The Bhagavad-Gita* である⁴⁵。彼は、この聖典を、19世紀の標準版となっていた Charles Wilkins 訳 *The Bhagavat-Geeta* (London: Nourse, 1785) で読んだ⁴⁶。Krutch によれば、ソーロウはこれを1845年の冬 *A Week* 執筆中に精読した⁴⁷。彼は、1854年に再読し多くの句を書写している。ソーロウは、*A Week* にウィルキンズの言葉を引用して述べている。「英国のインド支配が終わることがあっても『ギータ』は永遠に残るであろう」と。

ソーロウは、ウォルデン湖畔の独居生活中に、『マヌ法典』と『ギータ』に親しみ、彼の好きなことばを用いれば、「夜のトオモロコシのように成長し」、変態をとげ、精神を新生させていった、ということが出来る。ソーロウが『ギータ』をいかに高く評価していたかを彼のことばに聞こう。

The New Testament is remarkable for its pure morality; the best of the Hindoo Scripture, for its pure intellectuality. The reader is nowhere raised into and sustained in a higher, purer, or *rarer* region of thought than in the Bhagvat-Geeta. … It is unquestionably one of the noblest and most sacred scriptures which have come down to us. (*A Week*, 142)

I would say to the readers of Scriptures, if they wish for a good book, read the Bhagvat-Geeta. … translated by Charles Wilkins. It deserves to be read with reverence even by Yankees, as a part of the sacred writings of a devout people; and the intelligent Hebrew will rejoice to find in it a moral grandeur and sublimity akin to those of his own Scriptures. (*A Week*, 147-148)

In comparison with the philosophers of the East, we may say that modern Europe has yet given birth to none. Beside the vast and cosmogonical philosophy of the Bhagvat-Geeta, even our Shakespeare seems sometimes youthfully green and practical merely. … *Ex oriente lux* may still be the motto of scholars, for the Western world has not yet derived from the East all the light which it is destined to receive thence. (*A Week*, 149-150)

ここにみられる強烈なまでの異教への傾斜は、ソーロウの内部には以前からあった。彼は、1838年頃、コンコードのユニテリアン教会から離脱していた。彼は、既成のキリスト教のわくからすっぱりと抜け出してしまっていた。権威主義的で因習化した教会の神を次のように厳しく批判する。“It seems to me that the god that is commonly worshiped in civilized countries is not at all divine, though he bears a divine name, but is the overwhelming authority and respectability of mankind combined. Men reverence one another, not yet God.” (A Week, 65-66) ソーロウの求めるのは God なのであって god なのではないのである。彼のキリスト教批判は教会の根底をもゆさぶる発言をも生み出す。“Some, to me, seemingly very unimportant and unsubstantial things and relations are for them everlastingly settled,— as Father, Son, and Holy Ghost, and the like. These are like the everlasting hills to them.” (A Week, 70) 『聖書』を軽視したソーロウは、ついに、キリストを人間に引き下してしまう。“Christ was a sublime actor on the stage of the world.” (A Week, 74) 彼は、自己と神との関係を、キリスト教の中に見出せなかったのである。ソーロウは、ヒンドゥー教徒の方がヘブライ人よりもはるかに静かに完璧に宗教的であると考えていたのである。神の絶対性に対して個人の霊的個性の尊敬を徹底して尊重したソーロウが『ギータ』をえらんだのは、『ギータ』が国家や教会に対する義務は議論の対象とせず自己に対する自己の義務についてのみ述べているからなのである²⁴、更に、彼が『ギータ』にひかれたのは、彼の精神の中に本来そなわった素質があったからであり、ピューリタンの子孫として、生活の簡素化と禁欲生活を信条としたピューリタンであったからだという意見がある²⁵。また、生来自然を愛し孤独を好んだソーロウの気質は、ヒンドゥー教の哲学の説く沈黙と思索の美德と一致したという説もある²⁶。超絶主義者の態度とヒンドゥー教徒の態度の相違はきわめて微妙であるために、エマソンを師として超絶主義の思想から出発したソーロウは、それに類似したヒンドゥー教の思想を受容しやすかった、とも考えられよう。

個人の主体性と自己信頼を重んじたソーロウは、キリスト教を宗教の中の独占の地位からひきおろし、仏教やヒンドゥー教と並べてしまう。彼の信念は“Every people have gods to suit their circumstances.” (A Week, 66) なのである。ソーロウは一人の神秘家として、神（彼はこれを *Walden* の中で the perennial source of our life と呼び *A Week* では everlasting Something または Universal One と言っている）に近づぐべく真摯に生きた。彼の最大の関心事は大宇宙の中に神を見ることであった²⁷。その彼にとっては、形骸化した宗教にとらわれることは無意味であった。

I trust that some may be as near and dear to Buddha, or Christ, or Swedenborg, who are without the pale of their churches. It is necessary not to be Christian to appreciate the beauty and significance of the life of Christ. I know that some will have hard thoughts of me, when they hear their Christ named beside my Buddha, yet I am sure that I am willing they should love their Christ more than my Buddha, for the love is the main thing, and I like him too. “God is the letter Ku, as well as Khu.” (A Week, 68)

このような思想をもつソーロウは、当然のこととして、当時の知識層の人々から白眼視されたのである。ソーロウが生前、また、死後も長く酷評された原因の一つがこれである。ソーロウの願望は、大自然に融合し宇宙の根源と合一すること、換言すれば、現象界 (maya) に依存することを捨て、Brahma —— 一切生類の究極の目的で宇宙の根本原理——との融合を果たすことにあった。これがために、『ギーター』に見出したものは何であったろうか。

The Oriental philosophy approaches easily loftier themes than the modern aspires to; and no wonder if it sometimes prattle about them. It only assigns their due rank respectively to Action and Contemplation, or rather does full justice to the latter. Western philosophers have not conceived of the significance of Contemplation in their sense. (*A Week*, 142-143)

Behold the difference between the Oriental and the Occidental. The former has nothing to do in this world; the latter is full of activity. (*A Week*, 147)

西洋思想と東洋思想が動と静との対照の下で対比されている。ソーロウは、静かなる東洋思想の中に瞑想の何たるかを見出そうとしている。彼が『ギーター』から学んだ最大のものは瞑想であったという分析は、ソーロウ研究家に共通した見解である。ソーロウは、『ギーター』を Contemplation と Elevation という2つの角度から賛美している。瞑想という視点で眺めるとき、ゲーテは理性の領域に止まりヒンドゥー教の聖者には遠く及ばなく、シェイクスピアも広大で宇宙論的な『ギーター』の哲学の前では青二才に見える、とソーロウは述べるのである。瞑想の意味について、東洋的な色合いで深くソーロウは気付いていたのであろう。『ギーター』がソーロウの心の書となり生涯の指針となったことは間違いはない。『ギーター』からの引用は *A Week* の「月曜日」の章の数ページにわたってみられるが、そのいくつかを掲げたい。

For the man who doeth that which he hath to do, without affection, obtaineth the Supreme. (*A Week*, 145)

「執着を離れて行為を行なう人は最高所（解脱）に到達するから」（『ギーター』第3章，19節）²⁴

Wise men call him a *Pandee*, whose every undertaking is free from the idea of desire, and whose actions are consumed by the fire of wisdom. (*A Week*, 145)

「すべての行為が欲望や意図を離れた人、その行為が知恵の火で焼き尽くされた人を、知恵のある者は賢者と呼ぶ」（『ギーター』第4章19節）

He is both a Yogee and a Sannyasee who performeth that which he hath to do independent of the fruit. (*A Week*, 145)

「行為の結果を期待せず、義務的行為をなす者、彼は遠離者（サンニャージン）であり実修者（ヨーギ）である。」（『ギーター』第6章1節）

4

ソーロウがウォルデン湖へ赴いた時期は、儀式的行動によって崇高なものに到達するため

に自然に入る試みの時であり、その行動の指針を提供したのは『マヌ法典』と『ギータ』であった。昔日の回想記 *Walden* では、ウォルデン湖畔での自然との融合の体験が語られるが、独居生活時代に執筆された *A Week* では、体験の結果より行為そのものが記される。ここでは感覚的直覚的世界が展開され、metaphysical な雰囲気が満ちている。孤独、禁欲、清貧、自然との共感、瞑想などは彼の行為そのものでもある。

“This world is but canvas to our imaginations.” (*A Week*, 310) この言葉にソーロウの世界観が集約されている。彼の真実在 (Reality) は Brahma なのだ。真実在の探求へむかうソーロウは無限に内面に沈潜する。彼は主張する。“The ears were made, not for such trivial uses as men are wont to suppose, but to hear celestial sounds. The eyes were not made for such groveling uses as they are now put to and worn out by, but to behold beauty now invisible. May we not see God?” (*A Week*, 408) 見えないものを見、聞こえないものを聞くという見者 (seer) に徹することによって、ソーロウは探求の旅の極点に到達しようとする。彼が、“If you can speak what you will never hear, if you can write what you will never read, you have done rare things. … The Unconsciousness of man is the consciousness of God.” (*A Week*, 351) と書くとき、見者ソーロウの意識は拡大し深まっていく。次第に膨張する意識には自然が流入し、自然との合一へと向かう。その体験をソーロウは語って言う。“Sometimes a mortal feels in himself Nature,—not his Father but his Mother stirs within him, and he becomes immortal with her immortality. From time to time she claims kindredship with us, and some globule from her veins steals up into our own.” (*A Week*, 404) これは神秘的な体験である。*A Week* には、求道者ソーロウや瞑想による精神の深まりゆく過程が書き記されている。彼の神秘家としての生みの姿が描き出されているといってもよいであろう。“Silence is audible to all men, at all times, and in all places. She is when we hear inwardly, sound when we hear outwardly.” (*A Week*, p 418) このことばは深く瞑想した者のみが記すことができる、と言いうる。ヒンドゥー教の聖典の教義に同感し神秘家として生きたソーロウは、神秘的な聖句 “Om” を発し瞑想し、ヨーガの行を通して Brahma に合一する彼自身のアプローチの方法については述べていない。従って、ソーロウが Yogi になったと判断することは困難である。

A Week には、ソーロウが8年間に及んで研究した彼の初期のヒンドゥー教の思想が色濃く展開されている。ジェスワインによれば、ソーロウの読破したヒンドゥー教関係の書物は14冊にのぼる。彼はこれを1840年から1854年にいたる14年間にわたって愛読し研究したのである。1854年9月英国人 Thomas Cholmondeley がエマソンへの紹介状をたずさえてコンコードへ来た。エマソンから Mrs. John Thoreau を紹介されたチョムレイはソーロウ家に滞在した。彼は、帰国後1855年11月、英語、フランス語、ラテン語、ギリシャ語、サンクリット語で書かれた東洋思想に関する44冊の書物をソーロウに贈った。彼はこれを死ぬまでいつくしんでいた⁹⁾。ソーロウの東洋思想への関心は生涯にわたっていた、と言えよう。ただし、ソーロウには現実に敏感な一面のあることを看過してはなるまい。彼が、“There are various tough problems yet to solve, and we must make shift to live, betwixt spirit and matter.” (*A Week*, 74) と言うとき、ソーロウは明らかにヤンキー的な現実

認識の上に立っているのである。

ソーロウは、制度上の宗派をすてた一種の世界宗教という考えを提唱している。

It would be worthy of the age to print together the collected Scriptures or Sacred Writings of the several nations, the Chinese, the Hindoos, the Persians, the Hebrews, and others, as the Scripture of mankind. The New Testament is still, perhaps, too much on the lips and in the hearts of men to be called a Scripture in this sense. Such a juxtaposition and comparison might help to liberalize the faith of men... This would be the Bible, or Book of Books, which let the missionaries carry to the uttermost parts of the earth. (*A Week*, 150)

中国人、ヒンドゥー教徒、ペルシャ人、ヘブライ人等の聖典を集めて人類のための聖典を編纂するこの提言は、ソーロウがインドやペルシャの思想を西洋の思想以上の関心をもって扱っていた証しである。彼を当時のアメリカ社会の背景の前に立たせるとき、東洋の聖典を読んで東洋の聖哲の息吹にふれた並々ならぬ彼の勇気ある発言と受けとめなくてはなるまい。彼が東洋の思想の中に魂の教いを求めようとし、*Ex oriente lux* をモットーとしていたことは認められなければならない。我々がソーロウに親近感をいだくのは、このようなソーロウ文学の中にとけこんで不思議に輝く Orient の光なのである。

〔注〕

- (1) Walter Harding and Michael Meyer, *The New Thoreau Handbook* (New York: New York University Press, 1980), pp. 92-93. Ethel Seybold, *Thoreau: The Quest and Classics* (1951; rpt. New York: Yale University Press, 1969), p. 10.
- (2) Harding and Meyer, *The New Thoreau Handbook*, pp. 112-114. Robert D. Richardson, Jr., *Myth and Literature in the American Renaissance* (Bloomington: Indiana University Press, 1978), p. 250. を参照.
- (3) Mark Van Doren, *Henry David Thoreau: A Critical Study* (1916; rpt. New York: Russell & Russell, 1961), pp. 94-95., p. 97.
- (4) Arthur Christy, *The Orient in American Transcendentalism: A Study of Emerson, Thoreau, And Alcott* (1932; rpt. New York: Columbia University Press, 1972).
- (5) 西暦紀元前200年から紀元200年の間に書かれたとされる古代インドの大叙事詩『マハーバーラタ』(Mahābhārata) (全篇18巻) の第6巻第25—42章にあたりヒンドゥー教徒のバイブルともいふべき最も親しまれている7000の詩篇。Bhagavat は神, gita は歌の意。勇士アルジュナ (Arjuna) に向かって、ヴィシュヌ神の化身であるクリシュナ (Krsna) の説く哲学的・宗教的教養が内容。
- (6) Henry Seidel Canby, *Thoreau* (1939; rpt. Gloucester: Houghton Mifflin Company, 1965), p. 201.
- (7) Sherman Paul, *The Shores of America: Thoreau's Inward Exploration* (1958; rpt. New York: Russell & Russell, 1971), pp. 70-75.
- (8) Harding and Meyer, *The New Thoreau Handbook*, p. 93. この書では *A Thoreau Handbook* (1959) におけるよりも、東洋文学がソーロウに及ぼした影響を重視している。
- (9) Miriam Alice Jeswine, "Henry David Thoreau: Apprentice to the Hindu Sages,"

- unp. diss. (Ann Arbor, 1971). 本稿はこの論文に負うところが大きい。
- (10) John Aldrich Christie, *Thoreau As World Traveler* (New York: Columbia University Press, 1965), p. 251.
- (11) Henry Stephens Salt, *Life of Henry David Thoreau* (1890; rpt. Hamden, Conn.: Archon Books, 1968), p. 42. Franklin Benjamin Sanborn, *The Life of Henry David Thoreau* (Boston: Houghton Mifflin, 1917), p. 128. Arthur Christy, *The Orient in American Transcendentalism*, p. 190.
- (12) 尾形敏彦『エマソンとソーロウの研究』(風間書房, 昭47), p. 245. 本稿は同書の「『ウォルデン』にみられる東洋思想について」に負うところが大きい。
- (13) *The Writings of Henry David Thoreau*, 20 vols., Manuscript Edition (New York: AMS Press, 1968), Vol. VII, p. 55. 以下, 同書の *Journal* からの引用は()の中にWと巻数と頁数で示す。A *Week* の巻は A *Week* とする。
- (14) 尾形敏彦「『ウォルデン』にみられる東洋思想について」『エマソンとソーロウの研究』, pp. 243-294. 谷萩弘道「ソーロウに及ぼした東洋思想の影響」『ソーロウの人間像』(白凰社, 昭55), pp. 150-160.
- (15) Link C. Johnson, "Historical Introduction," *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*, ed. Carl F. Havde and Others (Princeton: Princeton University Press, 1980), p. 464.
- (16) Canby, *Thoreau*, p. 196.
- (17) *Consciousness in Concord: The Text of Thoreau's Hitherto "Lost Journal"* (1840-41), ed. Perry Miller (Boston, 1958), p. 156.
- (18) Sherman Paul, *The Shores of America*, p. 71. 菅沼晃『ヒンドゥー教—その現象と思想—』(評論社, 昭51), pp. 98-100. を参照。宇宙の本源としてのブラフマン (Brahman) と個人の主体としてのアートマン (ārman) を本質的に一つのものとするウパニシャッドの哲学の一元的世界観は、現象界を超越した Over Soul を考え、それが万人の中に存在すると考えたエマソンの思想に合致する。
- (19) Sherman Paul, *The Shores of America*, p. 72.
- (20) Henry D. Thoreau, *Walden*, ed. J. Lyndon Shanley (Princeton: Princeton University Press, 1971), p. 19.
- (21) *Ibid.*, pp. 99-91.
- (22) 絆川 羔 "Thoreau and the Bhagavad-Gita," (『英文学思潮』, 青山学院大学英文学会, 1963), pp. 43-61.
- (23) Canby, *Thoreau*, pp. 199-200. Charles Wilkins (1749-1836) は、ウィリアム ジョンズと共に「ベンガル・アジア協会」を創立し、初めて『ギータ』を英訳しヨーロッパに広めたイギリスの東洋学者。
- (24) Joseph Wood Krutch, *Henry David Thoreau* (1948; rpt. New York: William Morrow & Company, 1974), p. 82.
- (25) Robert D. Richardson, Jr., *Myth and Literature in the American Renaissance*, p. 100.
- (26) Norman Foester, "Intellectual Heritage of Thoreau," *Twentieth Century Interpretations of Walden: A Collection of Critical Essays*, ed. Richard Ruland (Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1968), p. 43.
- (27) 尾形敏彦『エマソンとソーロウの研究』, p. 252.
- (28) 拙稿「神秘家 Henry David Thoreau の挫折」『長野工業高等専門学校紀要』第10号, pp. 75-86.

29 引用の日本語は、宇野淳訳「バガヴァッド・ギータ」『世界の名著I』長尾雅人編（中央公論社、昭44）、による。

30 Arthur Christy, "Introduction," *The Transmigration of the Seven Brahmins: A Translation from The Harivansa of Langlois* by Henry David Thoreau, ed. Arthur Christy (New York: Haskell House, 1972).

（本論は、昭和54年10月7日、福井大学において開かれた日本英文学会中部地方支部（The Chubu Branch of the English Literary Society of Japan）第32回大会で発表した拙稿「H. D. ソーローの東洋思想」を改題し加筆したものである。）